

大菩薩峠

大菩薩峠は甲州裏街道第一の難処也、徳川の世の末、ここに雲起りて風雨関八州に及びぬ、剣法の争いより、兄の仇を報いんとする弟、数奇の運命に弄ばるる少女、殊に一夜に五十里を飛ぶ兇族の身の上甚だ奇なり、記者は故老に聞ける事実を辿りて、読者の前に此の物語を伝えんとす。

大菩薩峠は上り三里、下り三里、領分は甲斐国に属して居りますれど、事實は武蔵と甲斐との分水嶺になります。

ずっと昔、貴き聖が此の峠の頂きに立つて、東に落つる水も清かれ、西に落つる水も清かれと祈つて、菩薩の像を埋めて置いた、それから東に落つる水は多摩川となり、西に流るるは笛吹川となり、いづれも流れの末永く人を養い田を実らすと申し伝えられてあります。

江戸から出て、武州八王子の宿から、小仏、笹子等の峠を越えて甲府へ出る、それが所謂甲州街道で、一方に新宿の追分を右にとつて、真直ぐに行くこと十三里、武州青梅の宿へ出て、それから山又山を甲斐の石和に出る、これが所謂甲州裏街道（一名を青梅街道ともいう）で大菩薩峠は青梅から十六里、甲州裏街道の最も高く、最も険しきところがそれです。

古い記録によると、日本武尊が此の峠を越えて甲斐にお入りになったという、また日蓮上人も此の峠を越えた事があつたとやら見えて居ります。

慶応の頃に、海老蔵、小団次などという役者が、甲府へ乗り込む時に矢張此の峠を越えたそうです、ナゼ役者が本街道を避けて、ワザ／＼こんな裏道を通つたかといえはそれは本街道の郡内あたりは殊の外、人氣が悪く、強請られるのが怖かつたからとあります。

つまり、此の街道は変則の道で、已むを得ぬ人か、事を好む者でなければ、通わない路です、近頃は別に柳沢峠というのが開けたから、いよく以て、大菩薩峠は廢道同様になつてしまいました、時は天保の末の春の盛りの頃でありました、山々は、張り切ればかりの新緑をつけて、高山の常として峠の上は山桜が真盛りで、得も云われぬながめです。

朝がた、飛脚のようなものが只一人、萩原の方へ下つたまま、正午過ぎる頃まで人っ子一人通りません、漸く日が傾きかける頃になつて、

山が焼けるが

立たぬか雉子ヨ——



これが立たりよか——

子を置いて——

と妙な調子を張り上げて、鄙びた節おかしく歌う声が、青葉の中から洩れて来ると見れば、峠の頂きの十一面観音の社の横道に姿を現わしたのは二人づれの若い男、樵夫か炭焼でありましょう。

「どうだい、八幡の方では、また泥棒が出やがったとな」

「怖かねえ事だ、近頃のように彼方此方に強盗が出ては堪らぬ、仕事も早終えにして帰るべえ」

「ナニ怖ねえ事があるものか、泥棒が怖いのは金持だけよ、俺がような水呑みは更に祟りなした」

二人がこんな事を無遠慮に話し合うて、何気なく武州路の方を見下ろすと、誰か上って来るようです。

「あ、お武家が来る！」

本日挿絵「放れ駒」の定紋は走り馬なるべき誤りなり。

「ああ、お武家が来た」

と二人の若い拙夫は、面を見合わせ、気味悪しとてか、其のまま観音の右手の小径を切れて、小金沢の方へ下つて、若葉の繁みに身を隠してしまします。

程なく、武州路の方から此の峠の頂きへ登つて来たのは、彼等拙夫が認めた通り、一箇の武士でありました。

黒い木綿の着流しで、定紋は放れ駒、博多の帯を締めて、朱微塵、海老鞞の大小を横たえ、羽織をつけず、脚半草鞋もつけず、この険しい道を、素足に下駄穿で左の手で一才、腰のあたりを搔き上げて、サツ／＼と上りつめて、今頂上の観音の側の見晴らしの最もよい所へ来て、深い編笠をかたげて、峠の彼方此方を見廻しました。

歳は三十の前後、細面で、色は白く、屹と結んだ口にて、意地の強さと、長く切れた目の中に白く沈んだ光

を見せて、身は瘦形ながら、突立つた姿勢はシャーンとして、隙がない。

折柄、颯と梢を渡る山嵐かと思れば、キヤキヤツと喧たましい物の叫びが、眼の上の大きな栗の木の上で起ります、武士はやおら其の声の起るところに、首をめぐらして眼を注げば、それは猿です。

大猿小猿合せて十匹ばかり、手と手をつなぎ合つて、藤蔓の様な形になり、眼を剝いては此の武士の方を見つめ、時々歯を剝いてはキヤキヤツと啼く。

今日でも、大菩薩の頂きを通る者は、よく猿に出合します、どうかすると猿に悪戯をしかけて却て、飛んだ仕返しを食うこともあります、猿に見くびられるか、或は猿に怒られると何百となく味方呼んで来て、人を脅迫する事がある、これが怖いのです。

この猿共は、武士が一人旅と見て、例の脅迫をしかけるつもりであろうか、頻りにキヤツと噪いで居たのを、武士は凝と眼を据えたまま、猿共の示威運動を怖れようとの気色もなく、その滑稽な挙動を笑うでもない、猿は手剛しと見てか、繋ぎ合った手と手を放して、栗の大木の幹に身を絡ませて、隠れるようにして居ま



す、武士は此の滑稽な小動物には再び眼を呉れず、以前の場所を二足三足うつして、甲州路の方の坂路を見下ろしてさも人待ち顔に見えます。

さりとして容易に人の来るべき路ではない、何人を待つのであろう、斯うして物の一時も、武州路と甲州路の彼方此方を見下ろして居ると、木の葉の繁みから、微に人の声がします、武士は其の声を耳に受止めると、ずか〜と、立つて萩原街道の方を見下ろす。

「お爺さん——」

よく澄んだ子供の声がします、松の木立から身を斜めにして見下ろすと、羊腸たる坂路のうねりの処を今しも、登って来る人影は巡礼姿の二人づれです。

一人は大人で半丁ほど先に——それと後れて手に若い女郎花の一茎を携えた十二三位の女の子——今「お爺さん——」と呼んだのは此の子巡礼でありましょう。二人の姿を認めるや、武士は何と想方か、つと観音堂の背後に身を隠しました。

程なく、峠の頂に身を現わした年老いたる巡礼は、後を顧みながら、

「やれく、頂上へ着いたわい、お此処に観音様の御堂がござる」

社の前へ歩みを移して笠の紐を解いて、跪まると、

「お爺さん、此処が頂上かい」

子巡礼は、愛くるしい面立の、頬のあたりの血色もよく、元気もよく、老爺の傍に駈て来て、手に携えた一束の草花を、御堂の階段に供えて、笠の紐をとり、二人は首を地につけて、礼拝をすまし御詠歌を唱えた後、

「これからは下り一方で、日の暮れまでには楽に河内の泊りへ着く、それから三日目の今頃は、三年ぶりでお江戸の土が踏めるわけだ、——さあお弁当を食べましょう」

老爺は行李を開いて、竹の皮包を取り出します。

「お前もお腹が透いたろう、同じには頂上で食べた方が美味いからと此処まで我慢したほどに」

この時、子巡礼は立ち上がって、

「お爺さん、その瓢箪をお貸しなさい、この下で、さつき水の音がしましたから、汲んで来ます」

老爺の腰に下げてあった小瓢を目がけて斯ういうと、

「おお、そうだ、途中で飲んでしまつたげな、お爺さんが汲んで来よう、お前は此処で休んでお居で」

「いいのよ、お爺さん、妾が汲んで来るから」

子巡礼は引奪るように老人の手から、瓢を取って、山道をかけ下ります、小金沢に流るる清水を汲もうとて。

老爺は空しく其のあとを見送って、呆然して居ると、不意に背後から人の足音が起ります、振り返ると、

「老爺」

それは最前の武士でありました、周章く、

「はい」

老爺は居住居を直して、恭しく挨拶をしようとする時、彼の武士は忙わしく前後を見廻して、

「これへ出ろ」



編笠も取らず、何の用事とも言わず、小手招ぎするので、巡礼の老爺は、怖るく、

「はい、何ぞ御用でござりまするか」

小腰を屈めて、進み寄ると、

「彼方へ向け！」

この声諸共に、パツと血煙が立つ、何という無残な事でしょう、老巡礼は胴から腰車を落されて、呀という間もなく、胴体全く二つになって青草の上に俯伏してしまいました。

二尺三寸余の刀の刃先に染む、老人の生血の滴りを、しばらくは疑と見て居たが、つと、彼の巡礼の笈摺の切れ端で刃を拭います。

「老爺さん——」

例の澄んだ少女の声、——老爺も飲み自分も飲まんと、水を満たした瓢を捧げて欣々とかけて来る時、武士の姿は掻き消すように、何れとも行方わからず。

四

「お爺さん、水を汲んで来てよ」

少女は、老爺の姿の見えぬのを、少しばかり不思議がって、

「お爺さんは何処へ行つたらう」

お堂の裏の方へでも行つたのかしらと、瓢を捧げたまま、来て見ると、

「あれ——大変」

瓢を投げ出して、縋りついたのは、老爺の屍骸でした。

「お爺さん、誰に殺されたの——」

我を忘れて、抱き起そうとしたが其の力もなく、伏し転ぶ筈に老爺の血潮が、浸み上がります。

「お爺さん——お爺さん」

いくら呼んでも、二つになつて倒れた人の、生き甦る例はありません。

「誰に殺されたの、殺した奴は何処に居るの」

怖れや、驚きを通り越して、幼な心の憤りが、小さき五体をわな／＼と慄わして、堂の裏、小芝の蔭を馳せめぐりました。人の影さえ見えませぬ。

「お爺さん、誰に殺されたの」

ガツカリと力も折れて、また老爺の屍骸に縋りついて泣き崩れます。

ここに、この不慮の椿事を平気で高見の見物をして居たものがあります。最前の武士の有様から、老爺の殺されて、少女の泣き叫ぶ有様を、さも興ありげに、ながめて居たのは誰であつたらう、それは彼の栗の樹の猿です。

猿共は、今や樹からゾロ／＼と下りて来ました、そして面を見合せたり囁き合つたりするような身振をしつつ、十匹ほどのやつが此方へ歩んで来て、二人の伏し倒れた周囲を遠くから取り捲いてだんだん近寄ります。

小さな猿の一つが、つと駈けよつて、少女の頭髪にさしてあつた、小さな簪を一寸つまんで引き抜きました、仕すましたりと立ち戻つて、仲間の者に見せびらかすような真似をする。



それを見て、次なる小猿が又しても少女の頭髮へ手をかけて、櫛を抜きとり、さも嬉し気に振りかざします。

その間に大猿共は、さきに老爺が開きかけた竹の皮の握飯を引き出して、口々に頬張って旨そうに平げてしまおうと、今度は落ち散つて居た手頃の木の枝を拾つて何をするかと思れば、刀を差すような風に腰のところに宛がい、少女の背後へ廻るかと思れば、抜き打ちに——その木の枝で少女の背中を撲りつけました。

今まで何も知らず泣き伏して居た少女はこの不意の一撃を喰つて、ハッと気がついて、飛び起き、振り返つて見ると猿共が此の始末なので、

「あれ——」

と飛び退いたが、氣丈な子で、

「この野猿坊め、お爺さんを殺したのはお前達か」

と木の枝を持った猿に武者振りつくと、十四ばかりの猿は、眼を剥き出し白い歯を突き出してキヤツ／＼と云いながら、少女に飛びかかろうとして、凄い顔色を見せたが、忽ちパツと飛び散つて、我れ勝ちに再び彼の栗の大樹へ馳せ上ります。

「姉さん、怪我はなかつたかい」

と云いながら、其処へ現れたのは、年配四十位、

菅笠を被つて、堅縮の風合羽を着、足捲えをキリリと

し、道中差を一本差した旅の男です、手には小さな

松明を持って居たが其の火を消しませず、

「猿め、また悪戯をやりおる」

少女の傍へ近づいて、

「おやく、老爺さんが斬られて——」

さすがにギョツとした風で、立ちながら眉を蹙めて、

凝と老爺の屍骸を見下ろしましたが、少女を掻き別け、

屍骸へ手をかけて、ずっと其の切口を検べて見る容子

でしたが、

「ああ」

と感歎の息をついて、

「見事な切口だ、これだけの腕前を持つてる奴が、何

だつて此んな年寄を手にかけたらう、情けねえ話だ」

少しく眼をしばたきたきながら、少女を顧みて、

「姉さん、これはお前のお爺さんかい、お父さんではあるまじ」

「はい、私のお爺さんでござんす」

「何かい、西国の方でも廻つてお出でなすつたのかい」

「はい、三年前にこのお爺さんに伴われられ、江戸を出

て、三十三所から四国めぐりまでして、漸うこれまで

返つて来ましたら、お爺さんが殺されてしまいました、

おじさん如何したら好いでしよう」

双の袂を袖に当てて、泣き入ります、旅の人は巡礼

の姿を見て、

「何しても気の毒なことだ、お父さんもお母さんも無

いのだね」

父母のある者は、左と右を茜染にし、片親のあるも

のは、真中を茜染めにし、両親共にはないものは全く白

木綿の笄摺を着ることが、その頃の巡礼の慣わしであ

りました、此の少女の着て居た笄摺は、旅の雨風に

曝らされた上、寺々の印で地色も失せてしまつたほど

でも、元は白かつたに相違なく、それに滲みついた

老爺の血汐の色は頼るべき身寄のこれを限りというこ

とを示すようにも見られるので、旅人は親切に、



出産

「どうも不時の災難というもので、諦めるより仕方がない、俺も武州路の方へ行くから一緒に行こう、爺さんの始末は、これを少し下りると、村役人の屋敷がある、そこへ頼んで兎も角も扱って貰うのだ」

旅の人は自分の風合羽を脱いで、老爺の屍骸に打ち着せ、そこらの落木をかき集めて、松明の火をそれらうつし、

「斯うして火を焚いて置けば、猿や狼が近寄らねえからな」

旅の人のやる事は、物慣れてハキ／＼して居ます、処柄か知らん、此の旅人にも何となく凄惨い処があるように、それから少女を和め励まして、自分の背に負うて、此の旅人は峠を／＼と下りて行きます。

栗の大樹にたかって居た、例の小賢しい物共は、キヤツ／＼と歯を剥いて下り行く旅人の後ろを腹立しそうに見送る。

註曰、大菩薩を通る者は松の木の「ヒデ」という処でこしらえた松明を用意する、これを点して、獣類を追うのです、猿は最も火を怖れます。

大菩薩峠を下りて、多摩川の岸づたいに、十里ほど東へ出ると、川を隔てて、右手に、武州の御嶽山があります。

御嶽山の麓で、矢張川を隔てて此方に、沢井という村の、中程の山の中段を切り拓いて、立派な冠木門の左右に白壁の塀をめぐらした、城郭とも思われるほどの大きな構えは、これぞ相馬將門の血統を引くと称せらるる、此のあたりの豪族、机、龍之助の邸宅です。

門を入れて先ず耳に入るのは、左手に見ゆる、九歩と五歩とに建てたる道場から洩れて来る竹刀の響であります。

「皆さん、お茶を上げなれ」

机家の使い女は、大きな土瓶に茶を入れて、茶道具と共に運んで来て、一息入れて汗を拭いて居る門弟衆の処へ持つて来ると、都合十人ほどの門弟が茶を飲みながら、

「お藤さん、若先生はお帰りか」

「いえ、まだお帰りではございません」

「はて……」

黒の革胴に垂ばかりつけた青柳という忍藩から来た修業の若い武士が、一寸浪面を作つて、

「当家の若先生にも大抵呆れる、真逆五日の大試合をお忘れでもござるまら」

「左様さ、甲源一刀流分け目の大試合を三日という鼻の先に控えて居ながら、例のブラリと山歩き、御当人より我々の気の揉め方は、神入山の若杉が二百十日の嵐にあつたよりまだ強い」

斯う云つて矢張り眉を蹙めて見たのは斎藤と云つて、川越藩の修業者で、優れて遅い若者、

「時に——」

飲みさした茶碗を置いて、

「近頃の強盗沙汰も心外千万じやて」

「如何さま、甲州は府中、勝沼、石和、八幡より葦崎までも、武州は江戸街道筋は申すに及ばず、秩父、熊谷より、上州野州へかけて、日毎夜毎に強盗の沙汰じゃ、八州は眠つて居るか、さても手緩い」

「それほどの強盗に、罪人は一人も揚がらず、それに近頃はまた彼方にも此方にも辻斬で、人心恟々たりじゃ、何という体たらくか、八州や代官は腹切ものだが」



「さようく」

中ほどから口を出したのは、武士ではなく、平太郎といつて、この附近から稽古に来て居る百姓の息子です。

「大菩薩にも昨日とやら辻斬があつたそうにござりまする」

「ナニ大菩薩に」

「年老つた巡礼が一人、生胴を物の見事にやられて無惨な最後を遂げたと、甲州から来た人が口々に申して居りまする」

「やれ早や、年寄りの巡礼が、無惨な事じやて」

「それにしても、此の沢井村界限に限つて、強盗もなければ、辻斬もない、これはつまり沢井道場の余徳でござろうがな」

「沢井道場の余徳と申して、貴公等は其の数に入り申さぬ、此の青柳と若先生の名に怖じて、悪者共が寄り附かぬわ」

「貴公に寄りつかぬは悪者はかりでない、若い女、優しい若衆、皆んな面を見て逃げ出すわ」

沢井道場でこんな噂をして居るのは、前段大菩薩峠の辻斬の翌々日の事でした。

「冗戯は措き、道具なしの一本勝負参ろうか、齋藤氏」

青柳が誘いをかけると、齋藤も立ち上がって、

「心得たり、若先生の型を一つ行こう」

素面素籠手で、竹刀を取り上げ、二人は道場の真中に、突立ちます。

「沢井道場名代の音なしの勝負」

誰やらが口上口調で呼び上げる、余の者は、片唾を飲んで二人が勝負をながめて居る中に、一礼して左右に別れ、席の順は青柳が上で、互に竹刀を青眼につけて、気合を計ります。

「沢井道場音なしの勝負」というのは、此処の若先生即ち机龍之助が一流の剣術ぶりを、其の頃剣客仲間の呼びならわしでありました、竹刀にあれ、木刀にあれ、一足一刀の青眼に構たまま、我が刀に敵手の刀を些とも触らせず、二寸三寸と離れて、敵の出る頭、出る頭

を打ち或は突く、自流でも他流でも、強敵でも弱敵でも、龍之助が相手に向う筆法はいつもこれで、一試合の中一度も竹刀の音を立てさせない事もある、机龍之助が音なしの太刀先に向つては、何れの剣客も手古摺らぬはない、龍之助はこれによって負けた事は一たびもないのであります。

その型を、今二人は熱心にやつて居る、離れて睨み合うばかり、とんと竹刀の音をさせずお互に出る頭のみ覗つていましたが、齋藤の方がまず、もどかしくなつて、籠手を望んで打ち込む処を、得たりと青柳は竹刀を齋藤の頭に乗せました、この勝負、青柳勝ち、齋藤負けで、矢張腕前相当の成績でありましたから、お互に笑うて竹刀を引き、齋藤はまた浸む汗を拭きながら、

「音なしの勝負は、二倍も根がつかれる、若先生の太刀先に此れほど立ったら平伏つてしまおう、併し青柳氏には豪い御上達じや」

折柄、道場の入口とは斜に向つた玄関のところ、

「頼む」

中では返事がない。



「頼みましよう」

「まだ誰も返答をする者がないので、門弟連は此方から無遠慮に首を突き出して見ると、仲間らしいお伴をひとりつれて、美事に装うた若い婦人の影が、植込の間からちらりと見えましたので、

「やあ、お客は美しい女子であるげな」

「頼みましよう」

「またも音のう声に答うる返事がないので齋藤は、

「拙者が応対して参ろう」

「道場から母屋へつづいた廊下をスタ／＼と稽古衣に袴の儘で出て行くと、

「齋藤さん、若い女子のお客と見たら、臆面なしに応対にお出かけなすった」

「皆々笑って居ると、玄関の方で、

「ドレ」と、例の齋藤の太い声、ややあって女の優しい声で、

「あの手前は和田の宇津木文之丞が妹にござりまする、龍之助様に折入ってお目通りを願いとう存じまして」

「ハ、左様でござるか」

姿は見えないけれど、齋藤がしゃちよこばった様子  
が手にとるようです。

「お取次を願ひとう……」

「ハッその若先生はな……」

いよ／＼齋藤は四角張って「只今御不在でござる  
で」

「龍之助様はお留守」

女はハタと当惑したような声で、

「左様ならば何時頃お帰りでござりましょうか」

「さればさ、当家の若先生の事でござるから、何時帰  
ると、お請合も致し兼ねるで」

「遅くとも今宵はお帰りでござりましょう」

「それがその、今申す通り、何時帰るとお請合を致し  
兼ねるで、次第によりては拙者共御用向を伺い置きま  
して」

「それは困りましたこと、直々に目通を願ひませね  
ば申上げられぬ用向ありまして」

齋藤と来客の若い婦人との問答を、道場の連中は、  
よい御苦勞様に、竹刀も道具も其方のけにして洩れ聞  
いては面白がつて居ましたか、

「さて、お安くないぞ、若先生に直談判というて女子  
が乗込んで来た、前代未聞の道場荒しじや」

「その女子の素性というは何者であろう、それが詮議  
者じやて」

「最前のお名乗では和田の宇津木さまのお妹御とやら  
聞えましたがなあ」

「和田の宇津木の妹、はて拙者も宇津木の道場に暫ら  
く足を留めたが、妹というものをついぞ見た事はない  
が」

「見届けて参りましょうか」

例の平太郎は腰を立てて斥候の役を承わろうとする  
と、

「賛成々々、裏口から廻つて密と見て参られい」

益御苦勞様な話で、右の男が草履を突掛けて裏口  
へ廻ると間もなく、あたふたと馳せ戻つて、



「見届けて参りました、確に見届けて参りました」  
息を切つての御注進です。

「どの様な女子じや」

「宇津木の妹に相違ないか」

「違います、宇津木は宇津木に違いありませんが、あれは文之丞様のお妹御ではなくて、奥様でござりまする、然も評判の美人で……」

「なに、宇津木の細君か」

「はい、まだ内縁でござりまして、甲州の八幡村から、つい此の間お越しのお方、発明で美人で、里がお金持で評判もの、私は八幡に居りました時分から、篤とお見かけ申しました、正に違いはござりませぬ」

「文之丞の細君が、ナゼに妹と名乗つて、当家の若先生を訪ねて来たか、それが解けぬわい」

余計な詮索と余計な心配をして居る時

「あ、若先生のお帰り！」

と見れば門をサツ／＼と歩み入る人は、思いきや、一昨日大菩薩の上で、巡礼を斬つた武士——然も、其の時の扮装の儘で。

## 解題

伊東祐吏

本シリーズは、大正時代に都新聞（現在の東京新聞）紙上に掲載された中里介山「大菩薩峠」を新字、新仮名、総ルビ、挿絵つきで復刻するものである。

介山は大正二年（一九一三年）に「大菩薩峠」の連載を都新聞で開始し、八年間にわたって断続的に執筆したのち、他の新聞に連載を移した。都新聞での連載は、分量、年数ともに最大、最長で、全四十一巻（「甲源一刀流の巻」から「椰子林の巻」まで）のうち、はじめの二〇巻に相当する。ただし、「巻」という単位は単行本化の際に施されたもので、都新聞には六回にわたって次のようなかたちで連載されていた。

(タイトル)

(連載期間)

(連載回数)

第一回連載 「大菩薩峠」

大正二年九月～大正三年二月

一五〇回

第二回連載 「大菩薩峠（続）」

大正三年八月～十二月

一〇八回

第三回連載 「龍神」

大正四年四月～七月

一〇八回

第四回連載 「間の山」

大正六年十月～十二月

六七回

第五回連載 「大菩薩峠（第五篇）」

大正七年一月～大正八年十二月

七一五回

第六回連載 「大菩薩峠（第六篇）」

大正十年一月～十月

二九〇回

よって、本シリーズもこの体裁に従い、全六回（計一四三八回）の連載分を九巻で刊行する。第一巻には、都新聞での第一回連載「大菩薩峠」、一五〇回分（大正二年九月一二日～大正三年二月九日）を収めた。

都新聞に連載された「大菩薩峠」は、単行本化されるにあたって全体の約三〇％が削除されている。なかでも、本巻に収めた第一回連載分は削除された割合が高く、四〇％以上に及ぶ。

『大菩薩峠』の連載時と単行本でのテクストの異同については、これまでにも何度か指摘されてきたが、むしろ単行本化の際に書き込まれて洗練されたというのが定説であった。そうした見解は、介山の伝記を最初に執筆した笹本眞の著書に見られ、大衆文学研究の泰斗である尾崎秀樹や「新潮日本文学アルバム」で中里介山の巻を担当した竹盛天雄が同様の説明をしたことで流布したが、これは事実ではない。実際には、大きな加筆があるのは冒頭部分だけで、それ以外の箇所はほぼすべて、連載時のテクストから文章を取り除くかたちで編集されている。前掲の誤解は、おそらく冒頭部分のみを比較したことによって生じたものであろう。

これらの編集（概ねテクストの削除であるが）は介山自身の手によっておこなわれており、その要因としては、技術的・予算的な制約が考えられる。当時の介山は、新聞で連載小説をもっているとはいえ、都新聞社の一介の社員であり、まだまだ世間的に著名な作家ではない。また、都新聞は全国紙ではなく、特に花柳界などで読まれた関東ローカル紙である。そこで、当初『大菩薩峠』を単行本化する際には、介山自身が文選（活字を拾うこと）、植字（活字を組むこと）、印刷などの出版までの工程を、趣味も兼ねて手作業でおこなっていた。そして単行本として刊行する都合上、たとえば「甲源一刀流の巻」というように一冊の本の体裁にして適当な分量に編集する必要がある、この過程で連載時の多くの記述と描写が失われることになった。やがて介山は出版の作業を春秋社に委託し、その後は一冊あたりの定価とページ数が引き上げられたことで、徐々に削除の分量は減っていったが、削除的改編は都新聞版のテクストの全編にわたっておこなわれている。

なお、都新聞での掲載終了後、「大菩薩峠」の連載が大阪毎日新聞（東京日日新聞）に移ってからは、連載時から「無明の巻」などのように巻単位で掲載され、また、全国紙での連載で人気を博したこともあって、出版にあたっての障害がなくなり、単行本化の際に削除されたテクストは全体の三％にとどまる。さらに、それ以降の連載（国民新聞、読売新聞、介山の個人雑誌『隣人之友』など）では、テクストの改編はほとんどおこなわれていない。このこと

からも、都新聞連載分の「大菩薩峠」の編集がいかに大胆で、削除が大量であるかがよく分かる。

本書をこれまでの『大菩薩峠』と見比べていたとくと一目瞭然だが、介山の手による編集は非常に荒く、話がうまくつながらない部分も多々見られる。では、なぜそのように大量にカットされ、荒く編集された『大菩薩峠』が、そのことに気づかれることもなく今まで読まれてきたのか。

それはひとつに、『大菩薩峠』が大ベストセラーであった戦前の世においては、国民の多くが物語の内容や机龍之助という登場人物をよく知っていたからである。舞台化や映画化もされるほどであり、人々はすでにいわゆる『大菩薩峠』の独特の世界観を理解していたために、不完全なテキストでも物語を読めたのである。（ただし、当時において、人々が抱く『大菩薩峠』のイメージを形成していたのは、主に大毎〔大阪毎日新聞〕で連載された「無明の巻」以降の物語の世界観とそれを彩った石井鶴三の挿絵であり、一部の限られた読者を除き、都新聞版の「大菩薩峠」のイメージはほぼ失われていた。）

そしてもうひとつの理由として挙げられるのは、「有名な作品であるし、こういうものなんだろう」という読者の思い込みである。『大菩薩峠』に読みにくさを感じた読者は多いはずだが、読者としてはただそのテキストを受け入れるほかない。思うに、戦後の世の中で『大菩薩峠』という小説が徐々に忘れられていった背景には、新規の読者が読みにくいと感ずるテキストの問題もあつたのではないだろうか。

しかし一方で、これまでの粗雑に編集された『大菩薩峠』が、介山自身が定稿として世に送り出したテキストであることも間違いない事実である。では、なぜ介山はこのような編集をよしとして、原稿を元に戻さなかったのか。それは、単に介山が面倒くさがりで、それよりも新作の執筆に気が向かっていたからかもしれないが、ほかに、削除によって物語の設定や世界観の整合性をつけたためであることが、理由として考えられる。つまり、介山はただ分量を減らすためではなく、ある意図をもって物語を改編しているのである。

たとえば、本巻に示した第一回連載「大菩薩峠」においては、当初、物語の時代設定は水野忠邦の幕政改革がおこなわれた「天保年間」とされていた（第一回、第五一回）。机龍之助と宇津木文之丞が対戦した御岳山での奉納試合

がおこなわれたのは、天保十三年五月五日のことである（第二五回）。しかしその後、突如として時代設定が変わり、二〇年ほど時代がくだった「幕末」へと変更されている（第八七回）。おそらくこの変更がなければ、龍之助が新徴組（新撰組）につながる幕末史に巻き込まれ、そのために京都へ向かうこともなく、「大菩薩峠」は当初の構想どおりに、仇討ちと七兵衛伝説（青梅に伝わる怪盗の言い伝え）を描いて終了したであろう。だが、介山は設定を微妙に変更しながら書き進んでいくため、新たな展開が生まれると同時に、あとから修正する必要が生じる。

さらに、介山が物語にもっとも本質的な変更を施したのは、第五回連載のときである。もともと「大菩薩峠」は通俗的な仇討ち小説としてはじまったが、執筆の途中で介山は自らが描く物語の特異性に気づき、のちに仏教的な観念から「大乘小説」と呼ぶ小説へと変容していく。そしてこの時期は、まさに「大菩薩峠」の単行本化の作業をおこなったタイミングにあたっており、介山は後者の小説の世界観にそぐわない場面を、単行本化の際に取り除くかたちで編集している。そのため、介山は『大菩薩峠』を連載時のバージョンに戻さなかったのではないだろうか。（これらの点について、より詳しくは、拙著『「大菩薩峠」を都新聞で読む』を参照されたい。）

だが、以上のようなテクストの異同についての議論はともかく、本シリーズで再現された都新聞版の「大菩薩峠」は、単純に、読んでおもしろい作品である。通俗的な仇討ち小説であるだけに親しみやすく、井川洗厓（一八七六一九六一年）による挿絵も小説の情緒や世界観をつくりだすうえで多大な貢献をしている。

洗厓は岐阜の生まれで、大阪で稲野年恒に、東京で富岡永洗に師事した。前者は歌川国芳からの浮世絵、後者は狩野派の日本画の系譜の絵師である。当時の挿絵界は、それまで浮世絵が占めていたところに日本画が台頭し、ついに拮抗する状況にあったが、洗厓はその両者の技術を学んだことになる。都新聞では明治二十七年から、浮世絵師で月岡芳年門下の山田年貞（根津遊廓の引手茶屋の息子で、遊び好きが祟って早く亡くなった）と入れ替わるかたちで富岡永洗が筆を揮い、その後は、（松本）洗耳、洗厓と、永洗門下が占めた。洗厓が都新聞の挿絵を描き始めたのは、永洗、洗耳が相次いで亡くなり、洗厓が日露の戦役から復帰した明治三十九年のことである（『都新聞社報』第三五号）。介山も同年に都新聞に入社しており、以後、都新聞での介山の小説にはすべて洗厓が挿絵をつけた。（ただし、

洗厩がより広く世間に注目されたのは、その後、『講談倶楽部』の表紙や口絵を手がけてからである。）

のちに介山は、「挿絵は著作に帰属する」として、石井鶴三と著作権に関する裁判沙汰を起こすが、挿絵の役割については大いに認めているようで、特に、洗厩については、自分の作品をよく引き立ててくれたと深く感謝している（『大菩薩峠繪本』隣人之友社、一九三六年）。その介山と洗厩の二人が残した最高傑作が、都新聞版「大菩薩峠」であることは間違いないだろう。計一四三八回の連載中には、介山が郵送した原稿が紛失してしまった回や、明らかに洗厩のものではない素人の挿絵が掲載された回などもあるが（当時は、急場しのぎに記者が筆をとることさえあったという）、それらの当時のハプニングを含めて、楽しんでいただけると幸いである。

さいごに、本シリーズの刊行は、東京工業大学世界文明センターでおこなった『大菩薩峠』に関する研究会やシンポジウムの成果であり、また出版の意義を理解してくださった論創社の皆さまの熱意の賜物である。共同研究者の橋爪大三郎さん、加藤典洋さん、野口良平さん、論創社の森下紀夫さん、誉田英範さん、黒田明さんに心より感謝いたします。また、刊行のきっかけをつくってくださいくださった鷲尾賢也さん、研究会やシンポジウムでお世話になった皆様に厚くお礼申し上げます。